

# 杜詩の月

興膳 宏

一

中國の詩に描かれる月は、そのほとんどが満月あるいはそれに近い圓滿な月である。月は満ち缺けをくり返して、さまざまにその姿を變化させるのだが、私がかつて書いたように、「中國の詩では、圓い月が斷然細い月を壓倒している」(『月明の中の李白』、一九九二年、『中國文學報』四四)。

そのあと私はさらに、わが國では満月の前後を十三夜・十四夜・十六夜・十七夜と呼んで、「必ずしも圓滿な相のみを貴ばず、不完全な相にもそれ独自の良さを見出そうとする日本人の美意識」がその底に流れているといい、それと對照して、中國の場合を次のように述べた。

「しかし、中國には古來それに相當するようなことも考えもない。十三夜・十四夜、そして十六夜・十七夜の月も、それぞれに特有の美があるとされるのではなく、いつてみれば十五夜の月の近似値であることにおいて貴ばれるにほかならないのである。」

この指摘自體については、中國の詩史全般を見わたして、誤つていないつもりである。だが、少なくとも杜甫の詩に關しては、多少の留保が必要であり、詳しい検討を要するであろう。というのは、杜甫の晩年夔州きゆうしゅうでの作に、十五夜・十六夜・十七夜の月を連續して詠じた五律四首が存するからである。そして、それに關連して、杜甫の月を詠じた詩には、他の詩人には見られないいくつかの特徴も見出される。そのことを論證

するのが本論の趣旨である。

まず、件の詩から三夜の作三首(十五夜の詩は連作二首中の一首)を、順序を逐つて見ることにしよう。

八月十五夜月二首 其一

|       |                       |                          |
|-------|-----------------------|--------------------------|
| 滿目飛明鏡 | 滿目                    | 明鏡を飛ばし                   |
| 歸心折大刀 | 歸心                    | 大刀を折る                    |
| 轉蓬行地遠 | 轉蓬                    | 地を行くこと遠く                 |
| 攀桂仰天高 | 攀桂                    | 天を仰ぐこと高し                 |
| 水路疑霜雪 | 水路                    | 霜雪かと疑い                   |
| 林棲見羽毛 | 林棲                    | 羽毛を見る                    |
| 此時瞻白兔 | 此時                    | 白兔を瞻 <small>み</small> れば |
| 直欲數秋毫 | 直 <small>ただ</small> に | 秋毫を數えんと欲す                |

仇兆鰲『杜詩詳注』は、王嗣奭『杜臆』によつて、この詩を大曆二年(七六七)瀘西での作とした上で、後に續く十六夜・十七夜の詩と「一時の作る所」であろうとしている。小論もまたその推定に依據して考察を進める。

「滿目飛明鏡」は、眼中いっぱい鏡のような明月が映し出されることとで、それを受ける「歸心折大刀」は、故郷へ歸る心は切實でもあての

ない現状をいつている。「古絶句」(『玉臺新詠』卷十)に、夫の歸還を案ずる妻の心を述べて、「何か當に大刀頭なるべき、破鏡 飛んで天に上る」とあるのを踏まえるが、「大刀頭」は大刀の頭に付く「環」の隠喩で、同音の「還」(かえる)を暗に指している。つまり「大刀」は「還」の隠語になっており、月をこの夔州の地と故郷が共有しながら、自分は空しく月を仰ぐばかりで歸郷の宿願は叶わないという悲哀をこめた表現である。そうした境涯を餘儀なくしているのは、ほかでもない。自分が「轉蓬」のようにあてどなく各地をさすらう身だからであり、月の桂に攀じ上ることが不可能であるように、中天の月を振り仰ぎつつ、歸心の切實さを確認するのが領聯である。

後半の四句は一轉して、十五夜の月の美しさを微細に描き出している。「水路」とあるのは、趙次公注が指摘するように、作者が旅する舟の中に在つてこの詩を詠っているからであり、その「水路」があたかも霜や雪が降つたかのようにまっ白に輝いている。そして「林棲」すなわち林に棲む鳥の羽毛さえも見分けられるようだとはいえ、もちろん誇張表現ではあるが、月明かりの澄みきつた美しさがよく傳わつてくる。その連想はさらに延びて、結句では月に棲む白い兔の細い毛筋までが数えられそうだという。

かく詩の後半で描かれる中秋明月の美は、前半の歸心をより切なく増幅させる。これも前稿で述べたように、缺けるところのない圓滿な月は、その完全性によつて團圓の象徴となる。杜甫の早年の詩「月夜」が、「今夜鄜州の月、閨中只だ獨り看ん」と詠い出されるのは、長安の空に浮かぶ月を見ながら、遠く鄜州に在る妻の身を思いやり、切なる再會の願いをこめたものであった。この詩の場合、團圓の對象となるのは故郷である。この月夜が美しいものであればあるだけ、團圓への願いもひとしお切實なものとして印象づけられる。

なお、吉川幸次郎氏は「杜甫と月」という論文(『吉川幸次郎全集』第十二卷杜甫篇所收)で、宋・朱辨『曲洧舊聞』卷八を引いて、「中秋翫月」の詩が杜甫に始まることを紹介している。圓滿な月を詠うのは中國の詩の常態であつても、それを八月十五夜の月と特定して描くことは、朱辨によれば、この詩を以て嚆矢とすることになる。まして十六夜の詩は他の詩人には見られない。

#### 十六夜玩月(十六夜 月を遊ぶ)

|       |       |           |
|-------|-------|-----------|
| 舊挹金波爽 | 舊より挹む | 金波の爽やかなるを |
| 皆傳玉露秋 | 皆な傳う  | 玉露の秋      |
| 關山隨地闊 | 關山    | 地に隨いて闊く   |
| 河漢近人流 | 河漢    | 人に近づきて流る  |
| 谷口樵歸唱 | 谷口    | 樵歸りて唱い    |
| 孤城笛起愁 | 孤城    | 笛 愁いを起こす  |
| 巴童渾不寐 | 巴童    | 渾べて寐ねず    |
| 半夜有行舟 | 半夜    | 行舟有り      |

初句の「舊」字について、仇注は「昨宵を指す」といい、それに従えば、昨夜以來の月影ということになる。それに對して、浦起龍『讀杜心解』(卷三之五)には、「起は只だ月光の爽やかなるは、秋に於いて倍ます顯らかなること、昔自らして然るを言うのみ。俗解の舊を以て昨宵を指すとし、十六夜に泥定して解を索むるに依る勿れ」と、仇説に異議を唱えていす。いずれにしても、「十五夜」から「十六夜」を分かつ月光の獨自性というほどのものはここになく、むしろ圓滿な相としての「十五夜」からの連續性が顯著である。領聯以下に展開されるのは、この爽やかな月光の下にある天上・地上の光景であり、前半では巨視的に、後半では

微視的な視野の中で親しみをこめて描かれる。

十七夜對月（十七夜 月に對す）

秋月仍圓夜 仍なほお圓まき夜

江村獨老身 江村 獨り老ゆる身

捲簾還照客 簾を捲けば還まお客を照らし

倚杖更隨人 杖に倚れば更に人に隨う

光射潛虬動 光に射られて潛虬動き

明翻宿鳥頻 明に翻ひるがえつて宿鳥頻りなり

茅齋依橘柚 茅齋 橘柚に依り

清切露華新 清切 露華新たなり

初句に「秋月仍圓夜」という。「仍」に十五夜以來の連續性が込められている。下句の「還」「更」もその意味がある。「圓夜」に對するに「老身」を以てするのは、『杜臆』が「能く愴然たる無からんや」というように、圓滿な明月の下に獨り老いゆくわが身を點出して、月影の美しさと反比例した老殘の嘆きを印象づける。だが、頷聯以後の句ではむしろ月に寄せた悲哀の情は抑制的で、十五夜の篇に始まる爽やかな月光の美と、その下での遠近さまざまな情景への親近感が練り廣げられている。

要するに、十六夜・十七夜の月は、十五夜の月の近似値としてなお圓滿な相を呈するものであり、詩はもっぱらその圓滿な美しさを多様な景物に波及させながら展開される。だが、逆の視點からすれば、同じく圓滿な姿ではありながらも、十六夜・十六夜の月は、すでに十五夜の月とは微妙な違いを内包している。ことさら十六夜・十七夜の月として取り上げられるのは、杜甫の意識の中にその微妙さを區別しようとする氣持がはたらいっていたからではないか。

二

六朝以來の詩に描かれる月と比べて、杜詩の月においても一つ著しい特色となつてゐるのは、必ずしも完全な美しきの常態にある月のみを關心の對象としないことである。先に引用した吉川幸次郎氏の「杜甫と月」には、またこうもいつてゐる。「索引によるかぎり、「文選」には、天月、霄月、圓月、明月、朗月、華月、など、天上にある月のあかるさをたたえる語はあつても、初月、新月、また落月、そうした語は見えない」。杜詩には、そうした不完全な月、衰弱した月の描かれることも希ではない。

不完全な月の代表は、三日月である。三日月を表わすことばで杜詩に用いられるものとしては、「初月」「微月」「纖月」「新月」「弦月」などがある。「夜宴左氏莊」の「風林纖月落、衣露淨琴張（風林 纖月落ち、衣露淨琴張る）、「水會渡」の「微月沒已久、崖傾路何難（微月沒して已に久しく、崖傾きて路何ぞ難き）、「成都府」の「初月出不高、衆星尚爭光」（初月 出でて高からず、衆星 尚お光を爭う）、「遣意」其二の「雲掩初弦月、香傳小樹花」（雲は掩う初弦月、香は傳う小樹花）など、杜詩に描かれる三日月は少なくない。從來の詩人の氣づかなかつた月の魅力の發見といつてもよい。ただし、その點に關しては、李白を始めとして同時代の詩人たちが決して鈍感だつたわけではない。たとえばすでに初唐の駱賓王に、「玩初月」（初月を遊ぶ）という五言絶句がある。

忌滿光先缺 滿を忌みて光先に缺け  
乘昏影暫流 昏に乗じて影暫く流る  
自能明似鏡 自ら能く明らかなること鏡に似るに

何作曲如鉤 何を用てか曲がれること鉤の如き

また、李白には、「初月」と題して、「玉蟾離海上、白露濕花時」（玉蟾海上を離れ、白露花を濕おす時）で始まる五律がある。ただ、駱賓王にしても、李白にしても、ほのかな三日月の美を實景に即して描くというよりは、むしろ想像された機知なおもしろさを狙った感じが強い。それに對して、杜詩に描かれる「初月」には、常に繊細な美感が託されており、それが折々の作者の心象風景と深くかかわっている。

三日月は、早期の詩から晩年の詩まで継続的に見られる。秦州時代の「初月」はよく知られている。

光細弦初上 光細くして弦初めて上に  
影斜輪未安 影斜めにして輪未だ安んぜず  
微升古塞外 微かに古塞の外に升起  
已隱暮雲端 已に暮雲の端に隱る  
河漢不改色 河漢 色を改めず  
關山空自寒 關山 空しく自ずから寒し  
庭前有白露 庭前に白露有り  
暗滿菊花團 暗に菊花に満ちて團かなり

まことに細く、不安定な月である。かつて三日月は美女の眉に喩えられ、「蛾眉」の換喩として用いられるのが常套的な用法だった。しかし、ここにはそうしたパターン化されたイメージではなく、吉川氏のことばを借りれば、「淒涼」な景物として形象された三日月がある。それは單なる月の形の形容ではなく、作者自身の心の不安定さを象徴するものとして讀者に訴えかける。單純な美意識を喚起する媒體ではなく、作者の精

神のおののきを伴って迫ってくるものがある。そして、その印象は杜甫後期の詩にも連續してゆく。大曆元年（七六六）の作に擬される「洞房」にも、そうした三日月が描かれている。

|       |    |          |
|-------|----|----------|
| 洞房環珮冷 | 洞房 | 環珮冷ややかに  |
| 玉殿起秋風 | 玉殿 | 秋風起こる    |
| 秦地應新月 | 秦地 | 應に新月なるべし |
| 龍池滿舊宮 | 龍池 | 舊宮に滿たん   |
| 繫舟今夜遠 | 繫舟 | 今夜遠く     |
| 清漏往事同 | 清漏 | 往事同じ     |
| 萬里黃山北 | 萬里 | 黃山の北     |
| 園陵白露中 | 園陵 | 白露の中     |

これは、長安での往事を回顧した連作八篇の最初で、「洞房」は寢室のこと。自身の寢室から遠く思いを馳せて、昔の玄宗と楊貴妃が過ぎた王宮の「洞房」を追想している。「秦地」は、長安を指す。長安の上空にはいま新月が掛かり、興慶宮の龍池には今なお満々と水が漲っている。往事の回想に託して長安への「團圓」の思いを述べているが、その媒體が圓い月ではなく、「新月」であることに注目したい。それは確かに新しい發想ではあるが、杜甫と長安とを繋ぐ媒體としては、いかにもか弱い心細い。長安への歸還を願いながら、その實現から遠ざかる現状への心境が反映されているとしてよいのではないか。「斗斜めにして人更に望み、月細くして鵲飛ぶを休めよ」（夜「二首其二」）など、最晩年の詩に至るまで、初月には一貫してそうした不安定な氣分が窺える。

長安の空に掛かる半月を連想する點では、大曆二年（七六七）秋の作と推定される「月」三首其一も趣を均しくする。

斷續巫山雨

斷續す 巫山の雨

天河此夜靜

天河 此の夜靜かなり

若無青嶂月

若し青嶂せいしょうの月無からは

愁殺白頭人

白頭の人を愁殺せん

魍魎移深樹

魍魎 深樹に移り

蝦蟆動半輪

蝦蟆 半輪を動かす

故園當北斗

故園 北斗に當たり

直想照西秦

直ただちに想う 西秦を照らすを

巫山一帶に斷續的に降り續いた雨が上がつて、靜かに晴れた空に天の川が見渡せる。山上に高く浮かぶ月は、この年老いた身を僅かに慰めてくれる。月光の下に魍魎どもは林の奥に逃げこみ、かしこに棲む蝦蟆が半輪の月を動かしている。わが故郷はあの北斗の下に位置する、想いは遙かにこの月に照らされる長安へ飛んでゆく。「半輪」について、趙次公は七月十一夜・十二夜をいうとし、仇兆鰲は單に上弦の月という。いづれにしても、満月に至る以前の月である。なお、「動」は一に「没」に作る。ここでも、月はやはり杜甫と長安を結ぶ媒介として作用している。暫くぶりに顔をのぞかせた月を仰いで、心は慰められるが、月に誘われておのずと故郷のことが偲ばれ、改めて旅愁が身にしみる。この月が「半輪」であることも、届かぬ思いの切實さを暗示するかのようだ。

三

このように杜甫は缺けた月に新たな敘情を託したが、同じく缺けた月を對象としながらも、杜詩ではよく見ると、月の變化に着目した描き分

けがあることに注目しなければならない。それを示すのは、「初月」すなわち上弦の月に對して、下弦の月を意味する「缺月」（闕月）が描かれてゐることである。それは杜甫最晩年の大曆四年（七六九）二月、湘江西岸の鑿石浦さくせきぼでの作と推定される五言古詩「宿鑿石浦」（鑿石浦に宿す）である。

|       |                               |
|-------|-------------------------------|
| 早宿賓從勞 | 早宿 賓從勞す                       |
| 仲春江山麗 | 仲春 江山麗し                       |
| 飄風過無時 | 飄風過ぐるに時無く                     |
| 舟楫不敢繫 | 舟楫敢えて繫がず                      |
| 迴塘澹暮色 | 迴塘 暮色 <small>たん</small> 澹たり   |
| 日沒衆星嘒 | 日沒して衆星 <small>けい</small> 嘒たり  |
| 闕月殊未生 | 闕月殊に未だ生ぜず                     |
| 青燈死分翳 | 青燈死して翳 <small>かげ</small> を分かつ |
| 窮途多俊異 | 窮途 俊異多く                       |
| 亂世少恩惠 | 亂世 恩惠少なし                      |
| 鄙夫亦放蕩 | 鄙夫亦た放蕩にして                     |
| 草草頻年歲 | 草草として頻りに年歲                    |
| 斯文憂患餘 | 斯文 憂患の餘                       |
| 聖哲垂象繫 | 聖哲 象繫 <small>たんけい</small> を垂る |

前半八句が景、後半六句が情である。季節は春になったが、風は激しく、ために舟を岸に繫がず、入江に乗り入れて風を避ける。「迴塘」は、本流から外れた入江で、そこは波も穏やかであり、舟から見わたすと、あたりに淡い暮色が廣がり、空には無数の星がまたたいている。缺けた月はなかなか姿を現わさず、ともしびは消えて星明かりに物の形がわずかに見分けられる。この「闕月」は、『禮記』禮運に、「（月は）三五にし

て盈ち、三五にして闕く」とあるのにより、下弦の月を指す。「古詩十九首」其十七にも、「三五 明月滿ち、四五 詹兔缺く」とある。下弦の月が昇るのは遅く、月齢二十日を過ぎれば、眞夜中になってやつと姿を見せる。仇兆鰲は「闕けて未だ生ぜざるは、必ず初二なり」といい、「闕月」を二日の月として認めている。しかし、上弦の月は昇るのが早く、舊曆二月の日暮れにはとうに仰ぎ見ることができはるはずである。ここはやはり二十日過ぎの下弦の月とすべきだろう。

後半の敘情は、この夜の思索を述べる。この亂れた世にあつては、優れた有為の人物であつても報われることは少なく、自分はとりとめもなく放浪に時を移しているうちに、年月だけは容赦なく過ぎてゆく。困苦の中で周文王が『易』の象傳を作り、孔子が繫辭傳を作つたように、私も詩作に自分の務めを果たそう。

「缺月」は、やはりこの大曆四年あるいは翌五年の夏に作られたと推定される五言古詩「湘江宴饒裴二端公赴道州」（湘江にて宴し裴二端公の道州に赴くを饒す）にも見える。

熱雲初集黒

熱雲初めて黒きを集め

缺月未生天

缺月未だ天に生ぜず

これは最後の段落で宴果てて後の情景を描く場面であり、夏の夜はかなり更けている。この時刻になってまだ天に昇らぬ「缺月」といえば、やはり下弦の月である。「缺月」の語は用いられていないが、見ようによつては下弦の月ともいえる月もある。「月」と題する五言律詩で、大曆元年（七六六）あるいは同二年の作に擬せられる。

四更山吐月

四更 山 月を吐き

|       |              |
|-------|--------------|
| 殘夜水明樓 | 殘夜 水 樓に明らかなり |
| 塵匣元開鏡 | 塵匣 元 鏡を開き    |
| 風簾自上鉤 | 風簾 自ずから鉤に上る  |
| 兔應疑鶴髮 | 兔は應に鶴髮疑うべく   |
| 蟾亦戀貂裘 | 蟾も亦た貂裘を戀わん   |
| 樹酌姮娥寡 | 樹酌するに姮娥寡なり   |
| 天寒奈九秋 | 天寒くして九秋を奈んせん |

首句の「四更山吐月」について、仇注は「二十四五の夜」とする。「四更」は、今の時刻でいえば午前三時ごろだから、その夜も盡きかけるころ山の端に出る月といえば、確かに「缺月」と解してもおかしくない。この解釋に對して、浦起龍『讀杜心解』（卷三之四）は異議を唱えて、仇注は「四更山吐」の句に拘泥された理解で、誤りとする。そして、「全首の何等と光燦けるかを看よ」と、注意をうながす。『心解』が「開鏡」を滿月と見るのに對して、仇注は「鉤」を弦月の意に解して、先に引いた駱賓王「初月」（仇注は『西溪叢語』によって、沈佺期の作とする）の「既能明似鏡、何用曲如鉤」を擧げて例證とする。仇注によれば、「風簾自上鉤」は、缺けた月が軒端に掛かつたさまを、鉤と風簾の關係に見立てていることになる。解釋の分かれるところだが、仇注のように缺月と見ることも十分可能だろう。

「缺月」は、もちろん唐以前には見られない語である。唐詩にあつても、寓目の及ぶ限りでは、杜甫以後、わずかに韓愈「秋懷詩」其七の一例が見出せるのみである。

|       |                |
|-------|----------------|
| 寒雞空在棲 | 寒雞 空しく棲に在り     |
| 缺月煩屢瞰 | 缺月 屢しば瞰ることを煩わす |

下弦の月はいつまでも空に在るから、秋の夜長にしばしば仰ぎ見るのである。「缺月」が詩語として始めて登場するのは、杜詩である。それは缺けた月の中で、上弦の月から下弦の月を區別するために創出された語である。不完全な月の中でも、上弦と下弦の區別を明確に意識するのは、杜甫以前には見られないことだった。しかし、「缺月」の語は、唐詩においてはまだ定着しなかった。それが詩語として普遍的に用いられるには、次の宋詩を待たねばならない。

北宋を代表する詩人である梅堯臣に、「缺月」と題する七言絶句がある。

缺月來照屋角時 缺月來たりて屋角を照らす時

西家狗吠東家疑 西家の狗吠えて東家疑う

夜深精靈鬼初動 夜深くして精靈 鬼初めて動き

僊窳古莽無風吹 僊窳たる古莽 風の吹く無し

深夜の不氣味な氛圍氣を詠じている。「夜深」とあるからには、やはり下弦の月に違いない。梅堯臣には、ほかにも「缺月」の見える詩がある。

缺月如羞出 缺月 羞じて出づるが如く

荒雲不敢歸 荒雲 敢えて歸らず

(「未晴」)

青雲卷為髮 青雲 卷きて髮と為り

缺月低照額 缺月 低れて額を照らす

(「望夫石」)

また、蘇軾の詞「卜算子——黃州定慧院寓居作」にも、次のような句が

ある。

缺月挂疏桐 缺月 疏桐に挂かり

漏斷人初靜 漏斷えて 人初めて靜かなり

宋詩における「缺月」が、果たして全般的に杜詩のような下弦の月を指すものとして用いられたかどうかは、これらの例だけからはなおわかりに斷定しがたい。だが、ともかく詩語としての「缺月」が定着していたことは疑いない。

「初月」に連なる形態上の不完全な月とは別に、一夜の中での衰えゆく月を描くのが「落月」である。杜詩では、秦州時代の「夢李白」(李白を夢む)其一をはじめ、計四首が數えられる。

落月滿屋梁 落月 屋梁を照らし

猶疑照顔色 猶お顔色を照らすかと疑う

(「夢李白」)

夜闌接軟語 夜闌にして軟語に接し

落月如金盆 落月 金盆の如し

(「贈蜀僧閻丘師兄」)

寒沙蒙薄霧 寒沙 薄霧に蒙われ

落月去清波 落月 清波を去る

(「將曉」二首其二)

飛星過水白 飛星 水を過ぎて白く

落月動沙虛 落月 沙に動きて虚し

(「中宵」)

六朝詩の「落月」の用例としては、吳均「與柳惲相贈答」（柳惲に與えて相贈答す）六首其五の「閨房宿已靜、落月有餘輝」（閨房 宿より已に靜かにして、落月 餘輝有り）、劉孝威「擬古應教」の「雙棲翡翠兩鴛鴦、巫雲落月乍相望」（雙棲の翡翠 兩鴛鴦、巫雲 落月 乍ち相い望む）、庾信「行途賦得四更應詔」（行途に四更を賦し得 應詔）の「四更天欲曙、落月垂關下」（四更 天曙けんと欲し、落月 關下に垂る）などがある。落ちゆく月の形象としては、なお大ざっぱな感じを免れない。これらに比べて、杜甫の「落月」は、單に空を行く月が點出されるだけではなく、常に地上の身近な景物と對應しあっている。すなわちある時は「屋梁」、ある時は「金盆」、ある時は「清波」、そしてまたある時は「沙」と、「落月」が對應している。だから、「落月」はずっと身近な印象を與えるのだ。

李白にも「落月」を描く詩はある。「五松山送殷叔」（五松山に殷叔を送る）の「中天度落月、萬里遙相過」（中天 落月度り、萬里遙かに相い過ぐ）、「秋夜板橋浦汎月獨酌懷謝朓」（秋夜 板橋浦にて月に汎かび獨酌して謝朓を懷う）の「長川瀉落月、州渚曉寒凝」（長川 落月に瀉ぎ、州渚 曉寒凝る）、「春怨」の「落月低軒窺燭盡、飛花入戶笑床空」（落月 軒に低れて燭の盡くるを窺い、飛花 戸に入りて床の空しきを笑う）。これらに比べても、杜甫の「落月」はより具體的で精緻なイメージを結ぶものとしてよい。

そしてまた「落月」は、今にも作者の視野から消失しようとする月である。それは一夜の月を、最後の限られた短い時間の中で切り取った相である。消えゆく月をいとおしむように、杜甫はそれを自分の側に存する物に引きつけて詠ずる。そこには月への親近感と哀惜が重なっている。

さて、月への親近感、死を間近にした杜甫の最晩年の詩まで続く。たとえば大曆四年（七六九）の作になる五律「江漢」。

江漢思歸客 江漢 思歸の客

|       |              |
|-------|--------------|
| 乾坤一腐儒 | 乾坤 一腐儒       |
| 片雲天共遠 | 片雲 天は共に遠く    |
| 永夜月同孤 | 永夜 月は同じく孤なり  |
| 落日心猶壯 | 落日 心は猶お壯んに   |
| 秋風病欲蘇 | 秋風 病は蘇えらんと欲す |
| 古來存老馬 | 古來 老馬を存するは   |
| 不必取長途 | 必ずしも長途に取らず   |

江漢の一帶をさすらう杜甫にとって、月は孤獨感を共にする仲間だった。落日に老いてなお壯んな鬪志を掻き立てながら、自分を勵ましているが、どうしても否定できないのは、彼が常に願ひ續けてきた故郷への歸還がますます絶望的になつてゆくことである。それが月に親しみと同時に孤獨感を覺える理由であろう。そうした月への思いが切なく描かれる詩がいくらかもある。孤獨感の象徴としての「孤月」は、他にも「月圓」の「孤月當樓滿、寒江動秋扉」（孤月 樓に當たりて滿ち、寒江 秋扉を動かす）、「宿江邊閣」（江邊の閣に宿す）の「薄雲巖際宿、孤月浪中翻」（薄雲 巖際に宿り、孤月 浪中に翻える）が挙げられる。

「杜甫の月に現われる月色は、しばしば淒涼である」と、吉川幸次郎氏はいう。その淒涼さは、杜甫の放浪の旅が終わりに近づくにつれて、ますますその色合いを深めていったようである。

本論における杜詩の引用は、仇兆鰲『杜詩詳注』（一九七九年、中華書局）により、林繼中輯校『杜詩趙次公先後解輯校』（一九九四年、上海古籍出版社）等を参照した。

（京都大學名譽教授）